

ウクライナ・プロパガンディストとの夕べ

スコット・リッター・エクストラ (元米海兵隊諜報員、国連イラクの主任兵器検査官) 著、
脇浜義明訳 出典：Popular Resistance.org

1月6日の夕、ウクライナ戦争に関するパネルディスカッションに参加するように招待された。これは2003年米国主導のイラク侵攻以来私も関係している地域反戦グループの「平和のためのベツレヘム隣人」(Bethlehem Neighbors for Peace, BN4P)と、ベトナム戦争以来ずっと反戦運動をやってきたジョー・ロンバルドが創設した全国組織の全米反戦連合(UNAC)が主催するパネルディスカッションであった。ジョーが司会し、私は人権派弁護士でピッツバーグ法科大学院で教えているダン・コヴァリックとパネラーとして参加することになっていた。

会場であるベツレヘム公共図書館に着くと、テレビ・カメラと記者がいるのにびっくりした。私は以前にもBN4Pで講演したことがあるが、テレビ・カメラ付きなんか初めてであった。地元メディアが広告としてイベントの宣伝をすることはあっても、こんな集会をメディアが報道の対象にすることはなかった。メディアの取材はあっても、ひとりぼつんと記者が来ている程度で、カメラ付き報道陣が来るなんてことはなかった。

カメラ・クルーが二人いた。一人はオールバニーのABC系列局のチャンネル10、もう一人はスケネクタディ郡からやってきたCBS系列のチャンネル6。チャンネル10の方はすでに誰かとインタビューをしたようだった。

中にはいると、まあまあ数の人々は集まって、談笑していた。ところが何人か一特に目立つ黄色いパンツスーツの女性と小柄でずんぐりした禿げ頭の男の二人 — が私を怖い顔で睨みつけていた。ジョー・ロンバルドは聴衆の中に何人か親ウクライナ狂信者が混じっており、特に黄色い女性と禿げ頭の男性はトラブルと起こすかもしれないと忠告してくれた。

この種の集会に出るときは、私は自分がウクライナ政府の二つのブラックリストに載っていることを意識して、用心している。一つは「偽情報対策センター」(CCD)のブラックリストで、そこでは私は「ロシアのプロパガンディスト」「情報テロリスト」「戦争犯罪者」としてレッテルを張られ、リスト化されている。「戦争犯罪者」というのはウクライナ戦争をウクライナ政府の公式談話と著しく異なる形でしゃべることが「犯罪」とされるからだ。

第二のリストはウクライナ語で「ミロトヴォレツ」と呼ばれるもので、ピースメーカー、つまり交渉や話し合いで紛争を解決することを表明する人間のことを意味している。— これはウクライナの諜報機関SBUと関係している組織が発表したもので、別名「ヒット・リスト」とも言われる。リストに載った人物が殺害の対象になるからだ。

私は発言の内容のレジメを予めネットで発表していたけれど、敵意と憎悪でいっぱい二人を含む聴衆を前にして、レジメどおりにはやらなかった。テレビのライブ放送もある状況だから暴力沙汰にはならないと思ったが、ジョーが言ってくれた二人と、多分二人にく

つついている何人かの人間がディスカッションを潰すのではないかと心配した。

ダン・コヴァリックの発言を聞きながら、私は先手を取る決心をした — 開口一番言論の自由を強調し、CCDのために言論の自由が危機に瀕していると話すのだ。私は自分が「ロシアのプロパガンディスト」とレッテルを貼られていることを語り、そういうレッテル貼りが如何にアメリカの自由精神に反するか、議会が CCD に資金援助するのを支持したのは事実上の憲法修正第一条違反であると話した。私は議員、特にニューヨーク第 20 議会地区選出の民主党の進歩派と言われたポール・トンコを非難した。

私はカメラを意識して、言論の自由強調が記録に残るように演出したのだった。案の定の展開—新ウクライナ派の怨嗟と不満の爆発—となった。黄色いパンツスーツ女性とずんぐりした禿げ頭男性が、ダンや私の言うこと（司会のジョーの発言にさえ）すべてに大声で反対し、「ロシア・プロパガンダだ！」「奴らはロシアの宣伝やだ！」と怒鳴り、集会の進行を妨げた。

黄色いパンツスーツ女性の声は金切り声で、絶えず手をあげて、自分の主張を叫び、会の進行を妨げ、自分のウクライナ最良の意見の方向へ持って行こうと懸命だったが、支離滅裂で意味をなしていなかった。

ずんぐりした禿げ頭男性も期待を裏切らない。彼はウクライナに否定的と思われる発言には激しく首を振って拒否を表明し、彼が「親ロシア的」と判断する発言には立ち上って、大声で抗議した。彼は自分をプーチンとロシアのウクライナ侵攻に反対する「愛国的ロシア人」だと言い、戦争はウクライナが勝利すると聴衆に宣言した。彼は自分の主張を裏付けるために、集会前に 10 チャンネル・テレビでインタビューを受けた若いロシア人のザーメン・シュロコフを紹介した。

シュロコフはインタビューで、「ウクライナ戦争はプーチンが始めたテロ戦争、ジェノサイド戦争です。私は愛国的ロシア人です。愛国者として、ロシアにとって一番いいことは、ウクライナが戦争に勝利し、ロシア軍が引き揚げ、ロシア連邦で政権交替が起きることです」と語った。それから、自分がプーチンの昨年 9 月の予備軍 30 万人の部分的動員から逃れてロシア脱出を行ったことを話した。「自動車で行きました。隣国ジョージアへ入ろうとするロシア人の長い列がありました。近くにロシア軍がいたので怖かった。そして何が起こるか分からないという状況でした。私たちはすべての車を追い越すことができました。車の列の最後尾に着いて国境を越えるまで、約 4 時間歩かなければなりませんでした。」

禿げ頭男性もシュロコフとまったく同じ話をし、傍に立っているシュロコフもそうだと相づちで頷いた。

カメラ取材のおかげで会の様子はビデオで見られる。

私は点と点を繋いで全体像を見る思考法で訓練されたこともあって、パターンをすぐに見抜くことが出来る。私は CCD の設立当初からの主要なターゲットであり、ウクライナ紛争に対する私の立場に関する CCD の観点も熟知している。

だから、この夕べの会で、黄色のパンツスーツ女性、小柄の禿げ頭の男性、それにザーメ

ン・シュロコフの発言から一つのパターンを看破した。それはウクライナ政府が CCD を通じて行っている情報戦争で、彼らはその駒にすぎないことである。「プーチンは邪悪でロシアが悪い。ウクライナな英雄で、ウクライナはロシアに戦争で勝つ」という情報をいたるところに流し、世界の民衆を洗脳する情報戦略である。

会が終わりに近づくにつれ、ウクライナ政府の情報戦の展開を確信するようになった。

「愛国的」なロシア人は、同胞であるロシア人に危害を加えることを望まない。しかし、反ロシア的な意図を持つ人々には、危害を加えるのだ。

会が終了し、会場の外で小柄の禿げ頭の男性が私を執拗に追求しようとしたとき、彼は化けの皮を剥がして、「愛国的ロシア人」でないことを暴露した。彼は私を『ロシア・トゥデイ』からカネをもらっていると非難した。(パネルディスカッションの質疑応答のとき、『ロシア・トゥデイ』からカネを貰っているという噂があるが本当かと質問があり、私は、本当だ、原稿料だ。保守系、中道系、リベラル派などのメディアにも文を書いて原稿料を貰うが、それと同じだ、と答えた)

この答えが気に入らなかったらしい。彼は「お前は性犯罪で服役した人間だ。そんな人間をメディアは相手にしない。ロシア政府が悪魔に魂を売る代償にカネをくれるので、助かっただろう」と執拗にくらいついてきた。彼が私から何を引き出そうとしているのか分からなかった。喧嘩を売っているようでもなかった。腕力ではとても私の相手になれる体格ではなかった。カメラ・クルーが近くにいたが、もう撮影をしていなかったのだから、彼の出鱈目な言葉も録音されていなかった。

私はにっこり笑って、彼の肩を叩き、「もう終わったよ」と言った。こんな反応を予測しなかった彼は、不意打ちを食らったように後ずさりし、困った顔つきになり、次いで身体を前に乗り出し、両こぶしを固く握りしめて、「スラヴァ・ウクライニ、ヒロヤム・スラヴァ！」と甲高い声で、完璧なウクライナ語で言って、向き変えて、歩き去った。この句は「ウクライナに栄光あれ、英雄に栄光あれ」というネオ・ナチのステパーン・バンデーラのテロ組織ウクライナ民族委主義組織 OUN—B の「ハイル・ヒトラー」と同じような挨拶語である。OUN—B は 40,000 人のユダヤ人、100,000 人のポーランド人、20,000 人のロシア人を虐殺した。

「愛国的ロシア人」を自称する男がこんな言葉を自然に発するのは考えられないことである — 愛国者ロシア人が「モスカル」(ウクライナ民族主義者がロシア人に対して使う軽蔑語)。OUN—B¹の暴力の歴史遺産が現在のウクライナの民族主義者が軽蔑的に「オーク」

¹ OUN とはかつてウクライナに存在した反ポーランド、反ソ連を掲げる反政府組織である。1920 年に結成されたウクライナ軍事組織が学生組織と合同して、1929 年に新たに結成された。1938 年に指導者の暗殺をきっかけとして、組織は穏健派の OUN—M と民族主義的な若者から支持された OUN—B へと分裂し、互いに武力闘争を行った。後者は捨てパーン・バンデーラの派閥であった。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%8A%E6%B0%91%E6%97%8F%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E8%80%85%E7%B5%>

と呼ぶロシア系住民を殺害、拷問、強姦する犯罪行為と繋がっている。「オーク」を殺害しない場合でも、ウクライナ民族主義者たちは彼らを電信柱に縛り付け、顔に緑色のペンキを塗り、通りがかりの人が虐待するに任せている)

ロシアを愛するロシア人がウクライナ侵攻に反対し、プーチン大統領に反対するかもしれないが、ウクライナのネオ・ナチに賛同することは絶対にはないはずだ。第二次世界大戦でナチを支持したバンデーラを崇める極右民族主義者(パンデライト)の醜悪な儀式語を自分の語彙とするのは通常的人間的感覚や基準を逸脱するもので、小柄の禿げ頭の男性が本当にロシア人なら、自分の正常な感覚を失ってウクライナ極右民族主義にのめり込んだロシア人であろう。彼は「愛国的ロシア人」ではなく、人間の屑である。

その日夜遅く帰宅、ベツレヘム図書館のニュース待った。やがてチャンネル10とチャンネル6で放映された。私はインターネットでオンライン版を検索した。そこで私は黄色いパントスーツの女性の名がオレーナ・ミリティンスカ=レイクであること知った。

グーグルで検索すると、彼女は確固たる親ウクライナ活動家だった — ウクライナ軍や市民武装団への資金集めを懸命にやり、彼女のソーシャル・メディアはウクライナに関するあらゆることに夢中で愛情を込めていた。もちろん、それは悪いことではない — 言論の自由は米国人の不可侵の権利で、彼女は米国人である。彼女の言ったことは私の分析や思想と真っ向から対立するものであっても、彼女の表現権を支持する。1月9日の朝彼女がユーチューブにポストしたものは1月6日のパネルと私を罵倒する1時間15分にわたる下品なものであったが、それでも私は言論の自由権として、その権利を認める。(私はここでオレーナのために頑張っているのだ-私が彼女のビデオにリンクを張ることによって、彼女の購読者数と視聴者数が増えることを願って!)。その下品なメッセージは CCD のメッセージの鏡像と思われるが、彼女が直接 CCD と繋がっているという証拠はない。また、彼女は CCD のウェブサイトの情報やメッセージから自分の意見を形成したという証拠もない。しかし、賭けてもよいが、彼女は CCD のネット・デマゴギーを鵜呑みしている。

小柄の禿げ頭の男性に関してもテレビ放映とインターネットで正体が分かった。名前はアントン・コネフで、自称「愛国的ロシア人」でバンデーラ崇拝者。彼は「徴兵忌避者」だと言ったザーメン・シュロコフの世話を手伝っていた。しかし二人にとって都合が悪いことに、シュロコフはフェイスブックを利用していた。それを見ると、おそらく本人が望んでいる以上に、いろいろなことが分かった。

昨年秋の30万人予備役の部分的動員はすでに軍で現役勤務したロシア男性を対象としたものである。だから、どちらにしても予備役兵はいずれ現役勤務に復帰することになっていた。

シュロコフ青年は一度も兵役を経験していない。気楽な大学生活をしていた。研究室でアレクセイ・ナワリヌイの書いたものを読んでいて。軍勤務したことがないのでシュロコフは

動員される心配はなかったのである。自分も戦場へ動員されると思い込んでいたのか、それともプーチンのロシアから逃げる口実に動員を使ったのか、どちらかは分からないが、彼は元ソビエト連邦共和国であったジョージアへ行き、そこからあちらこちらの国を回って、最終的に米国・メキシコ国境に辿りついた。国境を越えて米国へ入り、亡命を求めた。実体のない脅威からの保護を求めて。

オレーナ、アントン、ザーメン三人組が刷り上げる脚本は、実際に CCD が書いたものではないとしても、その指示に影響されたものであろう。誰がザーメン・シュロコフのインタビューの段取りをしたのか分からないが、テレビ・カメラがインタビューを撮影し、パネルディスカッションに影響を与えるようにしたのである。メディア利用は情報戦争で重要な部分で、親ウクライナ勢力はその点で優れている。

彼らはソーシャル・メディアで「ウクライナに反対する意見を言う者はロシアのスパイ」とうメッセージをいっぱい、繰り返し、流して、メディア利用の後押しをした。私のような人間に公衆の前でウクライナ戦争について語らせることは「許されざることだ」とアントン・コネフはフェイスブックに書いた。確かに、(米政府のロシア=悪、ウクライナ=善という政策もあって — 訳者) 彼らのメディアとネットを使った情報戦略は、ウクライナに完全一致しない意見を抑え込んでいるように見える。

しかし、そうはいかない。平和のためのベツレヘム隣人 (BN4P) のメンバーのジョン・フランダースがパネルディスカッションの全過程を撮影して、BN4P のウェブサイトにもポストした。これまでも彼は何度も BN4P イベントをウェブサイトにも載せたが、せいぜい数百人程度が見るだけだった。ところが、1・6 イベントのビデオは、1月9日までに、114,000人が見て、2900以上のコメントが寄せられた。コメントの大部分はイベントを褒め、3人の妨害者を非難するものだった。

3人組の情報戦は失敗だった。彼らの思いに対立する声を潰そうとする計画が裏目に出たのだ。地味で小規模は町の集会だったものが、彼らの騒ぎのおかげで、グローバルな注目を得るようになった。親ウクライナ派の主張がイデオロギー的に脆弱であることが暴露された。事実に基づいてロシアの立場を語る我々の態度が評価されたようだ。

1・6 BN4P イベントは CCD にとって災難となった。私をこき下ろす試みが、かえってウクライナに関する総合的議論では私の言うことが検討に値するという結果を招いたので、私は大いに満足している。

私はダン・コヴァリック、ジョー・ロンバルド、トゥルーディ・クエイフ、ピッパ・バルトロッチ、ジョン・フランダース及びその他パネルディスカッションをやり遂げた BN4P のメンバーといっしょに活動したことを誇りに思っている。またやりたいと思っている。

あの夕に出会った3人組に対しては複雑な感じを抱いている。オレーナ・ミリティンスカ＝レイクは本当にウクライナを愛し信じているようで、その点は一貫している。その信条を表現する権利を尊重しなければならないし、彼女の情熱自体は、私は批判する気はない。彼女が会の妨害行為を控えて、意見の交換に力を入れていたら、イベントはもっと建設的で価

値あるものになっていただろう。それに1・6イベントのネット・ビデオがかなり大きな注目を浴びたことを考慮すれば、彼女が理性的に意見を発表していれば、自分の主張を多くの人に知ってもらえたであろう。私はよい議論、討論、対話に大賛成である。ウクライナに関しては、彼女だけでなく、どんな主張や議論にも対抗できる自信がある。彼女とそういう理性的議論をしたかった。

アントン・コネフに関しては、自分の祖国ロシアを裏切ったしっぺ返しを受けることになるだろう。彼はロシア嫌悪のロシア人であり、自分の人間性を犠牲にして、ウクライナ極右民族主義に魂を売ったことを自ら暴露した。ステパーン・バンデーラの醜悪なイデオロギーを身に着けたのは許されざることだ。フェイスブックを見ると彼の誕生地はサンクトペテルブルグであるが、どの面下げて故郷に足を踏み入れることができるのか。おそらく同胞ロシア人民から仕返しを受ける羽目になるかもしれない。どんな運命が待ち受けていても、それは自業自得なのだ。

残るはザーメン・シュロコフ。自分の意志で行ったのか周りに利用されてそうなったのかは分からないが、彼はありもしない徴兵の忌避者の象徴となった。若いとはいえ、少なくともパスポートなどではもう成人である。しかし、私が見た彼は、インタビュー中不安げに足をごそごそ動かす子ども、大人=子ども、もっとまともなものを与えられてしかるべき人物であった。

この大人=子どもは今後の人生をありもしない徴兵を忌避した決心を背負って生きなければならない。老齢になって自分の老いた顔を鏡で見る時、この嘘と恥にどう向き合うのであろうか。たとえ自分を誤魔化すことができても、ロシア人民、とりわけ予備役召集に応えて戦争に行って死んだ人の親や兄弟を誤魔化すことはできない。このような形で利用されることを許しているこの男に、私は怒りたい気持ちもある。しかし、彼のフェイスブックページや、彼が選んだ写真を見ていると、私が扱っているのは無邪気な人間なのだということに気づかされる。私は、ロシアの人々が彼を大人でなく臆病な子どもだったと寛大なることを希望する。あらゆる意味で。